

PROPOSAL

社会教育が街を変える
高校生からの声

「混雑するバスロータリーに ロードペイントを」

さいたま市議会議員（社会教育主事任用資格有） 佐伯加寿美

それは一本のLINEから始まった

3年前（2022年）のちょうど暑い時期であった。次のようなLINEが私のもとに届いた。

「チラシを拝見してメッセージしています。現在私は中等教育学校の4年生（※注）です。大宮駅の西口バス乗り場のことでご相談があります。朝の通学時間帯はこのバスロータリーは非常に混雑していてバスを待つ長蛇の列がいくつもできてしまい、どの列に並べば自分が乗りたいバスに乗れるのかわからない状況になっています。またこの乗り場は3つの高校が使用するため、3校の生徒と一般の方でさらに列が混み

あっています。

そこで、何行きの路線バスにどのようになぶのかわかりやすくするために、バスロータリーの床面にロードペイントを引くことができないかと考えました。しかし市にもバス会社にも相談にいきましたが断られてしまいました。力を貸していただけないでしょうか。」と。※（注）4年生は高校1年生にあたる。

かいつまんで載せたが、非常に丁寧な言葉づかいとその行動力に、これが高校1年生かとても驚いたことは今でも忘れられない。

私は毎週朝、駅で市民の方に市政レポートを配っており、その裏面に「モヤモヤやお困りごとはありませんか。」

と、連絡用の公式LINEの二次元バーコードを載せている。高校生のJくんはこれを見てLINEを送ってきてくれたのだった。高校生からの相談は初めてだったので、私はうれし驚きつつもすぐに返信をした。

Jくんたちのバスプロジェクト

夏休みに入ったある日、私とJくんは駅で待ち合わせをした。このバスロータリーには、1番・2番・3番乗り場が隣接しており、この中等教育学校・B高校・C高校と、同時に3校がこの乗り場を使用している。そしてこの3校では紳士協定によりバスの行先別で



バス停の混雑時の様子（2022年当時）

生徒が乗車するバスを分け、3校が同じバスを使わないように混雑回避の工夫をしているとのことであった。

Jくんたちの中等教育学校は、7年前に市立高校を廃校にして中高一貫校を新たに開校した学校である。1年生から募集を開始したので、この学校は6年間常に毎年一学年ずつ生徒が増え続けていくのであった。以前の高校の時は自転車通学の生徒も多かったようだが、中学一年から自転車を選ぶ生徒は少なく、1期生だったJくんが4年生になった頃には、4学年分の生徒がバスで通い、このロータリーは、大混雑の状況となっていたのだ。

さて、Jくんたちの学校は、市内でも先進的なプログラムを行っている。例えば身近な問題から世界的な問題まで課題解決に向けて考えをまとめ、互

いに話し合い最適解を見つける力を養う授業や、隔週土曜日に行われる自分で自分の学習をプロデュースするために外部講師を招いたり、自他校の生徒や地域の方々を呼んで自分たちで課題設定したことについて発表したりする授業（LDT: Learner directed time）なども設けられている。授業外の活動にはSA（Service as Action）とって、地域・学校・社会のために役に立ったり、地域社会に貢献したりする奉仕活動等もある。

JくんたちはこのSAの活動の一つとして「バスプロジェクト」を立ち上げていた。そこで、どのようにしたら大宮駅のロータリーの混雑を緩和し、年々混雑するバス利用者がよりスムーズにバスに乗れるかと、プロジェクト仲間（縦割り学年の生徒たち）との話し合いを進めていた。最初にもらったLINEの中にあったロードペイントとはこのバスプロジェクトの提案であった。

ロードペイントにたどり着く前に、一番最初にJくんたちは、バスの時刻表を作成した。全校生徒に配布し、どのバスが比較的空いているのかを記し、

イベント時など初めて学校に来る方への乗り場案内や土日の時刻表も掲載した。次にバス乗車案内。入学後や学祭などの人が多い時期には、プロジェクトメンバーたちは大宮駅のバス乗り場まで出向いてみんなでバス案内や誘導を行った。

また学校開校3年目には学校独自のスクールバスの運行も導入されたが、公共交通のバスより値段が高かったため、相変わらず学年が増えるごとにバス停は混雑していた。

実際私も登校時に見に行ったが、中等教育学校の生徒が使う2番のバス乗り場に並んでいる列は長く伸び、3番のバス乗り場のつきあたりでUターンしさらにそれが階段の上まで続いていた。さらにバスから降りるお客さんは、乗車しようと並んでいる人の隙間を縫って駅に向かおうとするため、狭いバスロータリーは人でごった返していた。

ロードペイント構想！

バスロータリー床面に

そこで次にバスプロジェクトが考え

たのは、行先別のバス毎に色分けした線を床に書くという、ロードペイントであった。これを引くことで、行先のバスと同じ色の線に並べば迷うことなく確実にそのバスに乗れるというものである。Jくんは私に相談する半年前に、まずバス会社に行き、実情を訴え施工のお願いをしたそうである。ところがバス会社からは、「市から許可ができないとの回答なのでうちはできない」という返事であった。Jくんは市役所にも行って受付で聞いたそうだが、「該当するところはない」と言われ困り果て、そのときにたまたま目にしたのが私のチラシの困りごと相談LINEであった。

さて、今ちようど社会教育士のフォローアップ研修で行われている「大航海時代の更改術2025・7～2025・12」（株サステナブルタウン）では目的と目標の違いについて学習したところであるが、それに当てはめてみると「みんなが心地よくバスを利用できるため」そんな目的を立てたJくんたちは、「バスの時刻表の作成」や「実際の乗り場での案内活動」という目標を立て次々実行してきたが、次なる目標は「ロー

ドペイントを引くこと」であったのだ。私は混雑回避と自分が並ぶ列が一目でわかるこのロードペイントという提案は、おもしろい！これはイけると感じた。それと同時に、高校生たちが自分たちでここまで調べて動いたことを無駄にしたくない、なんとかカタチにしたいという気持ちがメラメラと湧いてきた。

私はJくんと会った後、バス会社に赴き直接お話しをお聞きし、またこの相談にのつてくれそうな担当課を調べ、話を聞いてほしいとアポを取った。翌月Jくんと私は市役所の交通政策課を訪れ、Jくんは、混雑の現状、駅へのロードペイント、そして乗り場の変更等を説明し、担当職員さんは熱心に話を聞いてくださり、引き続き検討すること

つながる

↓市役所・近隣の高校・バス会社↓

2か月後、再度アポを取り、バスプロジェクトチームと担当職員が話し合う機会を設けた。プロジェクトメンバーの中から4人が参加し、現在の状



図を見せながら市職員に説明するバスプロジェクトメンバー

況をもとに改善方法について両者で意見交換を行った。

2022年12月には交通政策課に加え、地面の管理者である本市の道路環境課の職員も参画した。メンバーが事前に作成してきたロードペイント案を提示し、使う側からの意見、施工を了承する立場からの意見などを出し合った。こうして定期的に会合を設け、ロードペイント施工に向けて進み始めた。

翌年（2023年）3月には同じ大宮駅バスロータリーのバスを登下校で使っているB高校とC高校にJくんは学校を通じて働きかけ、生徒会のメン



佐伯加寿美
(さえき かずみ)

専業主婦 25 年の後、非常勤公務員で公民館職員、公募館長、国立女性教育会館勤務を経て、還暦の再出発でさいたま市議会議員に立候補。現在 2 期目。趣味のインディアカは歴 35 年。好きが高じて国際審判員取得。性別、年齢、障がい、国籍を超えて誰もが参画できる街づくりがテーマ。この 4 月から大学院修士課程に在学中。

バーに集まってもらい、問題や課題の共有をし、3 高校で話し合う機会を得た。こうした市立高と県立高の生徒同士が地域の問題解決の為に意見交換をすることは珍しいのではないだろうか。同時にどんどん連携の輪が広がっていくことに感動を覚えた。

またバス会社には、これまで市役所が情報共有を仲介していたが、ロードペイント案と一緒に考えてもらう必要があることから、話し合いの場に参画してもらうことになった。私はここからは話し合いの場には参加せず後方支援に回った。

2023 年 8 月、さいたま市・バス会社・近隣高校生・バスプロジェクトのメンバー 4 者で意見交換が実現し、ロードペイント施工にともなう詳細な位置確認などを行った。

学び合いの輪を広げ、多様なステークホルダーとつながり、みんなで地域

問題を解決していくことは「社会教育」であり、バスプロジェクトの活動は「まさに社会教育じゃない？」と改めて強く感じた。

オープン委員会の開催

さいたま市には常任委員会として 5 つの委員会がある。2023 年度はちょうど私が文教委員会（教育委員会とスポーツ文化部局を所管）の委員長であった。委員会の年間テーマを、「人生 100 年時代の学び」と設定。社会教育を調査研究することにし、最優秀公民館賞を受賞した若狭公民館（沖縄県）の視察なども委員会活動に組み込んだ。

さて、各委員会では「オープン委員会」というものを委員長主宰で開催することができ。会場を議会棟ではなく外に移し、市民を招き、広く情報発信し公開していくものと規定されている。

私はこの J くんたちのプロジェクトはまさに社会教育の実践事例であり、テーマと一致すること、社会教育がこうして街を変えていく力があること、つまり社会

教育は市政運営にとって必要であることを広く議員や、市民の方々に発信したいと考えた。

この中等教育学校では前述したように隔週土曜日に保護者、地域に開放して各種プログラムを公開する日（LDT）が設定されているため、ここを会場にし、オープン委員会を一つのプログラムとして学校に組み込んでもらうと考え、教育委員会や学校と折衝した。またバスプロジェクトの他にもこの学校の SA（Service as Action＝地域貢献活動）から 2 つの実践事例も発表してもらえることになった。

一つはスニーカープロジェクト。市のオリジナルスニーカーを創りたいとメンバーがアイデアを出し合い、地元のパティスリーと協働して実際に販売を行うまでの連携と学びについて。二つ目は震災復興支援プロジェクト。東北で居場所と就労の場を生み出している団体と連携し、生徒が不要になった T シャツを募り回収し、団体で布草履にしてみらい学校で販売し寄附につなげるという仕組みを立ち上げたグループ。どちらも「学び合い」と「地域の課題」と「他者との連携」が共通項のまさに「社

会教育」である。

ついに2024年2月、文教委員会では初となるオープン委員会をこの中等教育学校で議員・生徒・市民を交えて開催することとなり、テーマを「社会教育が街を変える」とした。

社会教育の重要性を伝えたい

気が付けばこんなに身近に「社会教育」は散りばめられているのに、未だに「社会教育ってなに？」と思われたり、聞かれたりすることが多いことも事実である。そこで埼玉大学の社会教育の第一任者である安藤聡彦教授に「社会教育の意義と地域課題解決について」と題し、オープン委員会では初めにミニ講演をしていただいた。

講演の中で先生は、アメリカ合衆国テネシー州チャタヌーガ市の事例を挙げた。それは、汚かった街・川を大学生が中心になって水族館をつくり、さらに周辺の再開発などを寄付で賄い、税金を使わずに、サステナブルタウンへと変化した事例である。「利用者・消費者としてのみ生活を続けていると、自ら問題を発見し解決する能力を失っ

てしまうことになる。私たちが今一番考えなければならぬことは、地域課題の主体は市民であるべきだということだ」と先生は話された。

そして「皆さんの学びには、社会に還元され、社会を動かす力となる可能性がある。そして学校の中での社会的な学びの環境を、社会の側からどのように豊かにしていくかという点を皆で考えて具体化していくことが重要である。」と続けられた。

地域に飛び出して問題や困ったことを見つけ出し、その原因を調べ、仲間とともに学び合い、他者とながって問題解決を生み出していく課題設定力、今後もっと生徒たちに必要になっていくであろう。安藤先生の言葉にあったように、この先私たち社会教育に携わる者には、若者が考えたことを社会の中で豊かにし具体化していくことが求められる。そのために、一緒になって考え、一緒にわくわくして、私たちが持つ人や機会や資源につないだりしながら、みんなで想いをつなげ、カタチを創っていかれたらと思う。

さて、当日恐れ入ったことが一つ。事前に生徒達には社会教育の実践事例

として紹介したい旨は伝えていた。するとスワイツプロジェクトのメンバーが、プレゼン冒頭こんな言葉を口にした。「私たちは、社会教育とは、『社会から育まれる自分たち』そして『社会を育む自分たち』。この2つが総合的に関係し合って新たな効果が生み出されることが社会教育だと思います。」と。いやいやこれにはびっくりした。社会教育をこんなにも素敵に言い換えてくれるなんて！

ついに完成

↓でもこれで終わりではない↓

2024年4月、Jくんが最終学年になった春休み、ベイントは一夜にして行われた。まずは写真をご覧いただきたい。

印刷上色の区別がつかないかもしれないが、バスの行先別に、オレンジ、グリーン、水色、ピンクなどバス系統の色と連動して線が敷かれている。列が上がる階段にも、そして階段上にも。そして春休みで学生はいなかったが、市民の方は、このベイントのとおりに整然と並んでいた。「ついにやった



バスロータリー階段上の表示



Jくんと筆者



色分けされたロードペイント

ね！」「いやあ、僕が卒業するまでにできないかと思いました。」そんな会話をJくんとしながら、ウキウキしてロードペイントを見て回った。

プロジェクトメンバーたちのロードペイント施工は、できて終わりではない。先輩からは後輩に、「とにかく気づいたことは忘れないようにメモをしておいて」と伝えられ、利用者目線で解決できた問題や、ペイントをしても残っている課題、ペイントによって新たに生まれた課題などを今後もバス会社や市役所の方と更なる改善について協議を継続していくことであった。「知」はまさに引き継がれていく。

2025年4月の朝、いつものように駅でチラシを配っていると、「おはよ

社会教育が街を変える

うございます！」とバスプロジェクトの次を引き継いだ生徒が私のところにやってきてくれた。「あれ？今日は？」という、「新学期でバスがとても混むのでメンバーたちはバス乗り場案内に来て今活動しているところです」そう言っ、にこっと笑うとまた乗り場のほうに走っていった。

街は変わったのだ。メンバーたちがやってきたことはまさに社会教育であるけれど、「それって社会教育だね」と言われなければそう認識しなかったかもしれない。社会や地域の中には気づかないだけで社会教育があちこちに在るのだ。

こうして声をあげ、問題から課題を見つけ出し、仲間と学び、多様なステークホルダーと連携してそれを解決に導く。まさにこの2年間社会教育の神髄をみている想いであった。そしてここに自分も携われたことに心より感謝したい。

社会教育はとかく教育委員会の範疇だけで捉えがちだが、こうしてまちづくりにも大きく関わり、実際に街を変

整然と並んでいる乗客



えていることを広く知ってほしいと思う。市長部局の中ではないまだに「社会教育ってなに？」と思っている方も多いことであるが、社会教育の力は最強であり、首長部局でもぜひ社会教育士の資格を取得してもらいたい。そして市民とのやりとりの現場に飛び出してその力をふるってほしい。

今回高校生たちの意見がカタチになって目に見えることができたことは、彼ら彼女らの自信にもつながったのではないだろうか。親身に

なっ一緒て一緒に考えていただいた職員の方々やバス会社の方々にも心よりお礼をお伝えしたい。

高校生たちは声を上げれば社会を変えられることができると実感したと思う。そして市政にも今後もっともっと関心を持ってくれるのではないだろうか。こういった実体験こそが主権者教育にもつながっているのだと思う。市にはぜひ若者の提案に予算をつけカタチにする取り組みをしてもらえるよう議会でも働きかけていきたい。

【コラム：Jくんから】

この経験を通して、諦めずに実現できる方法がないか探し続けることは、大切なことであると学べました。佐伯さんには最初、ダメ元でLINEの相談を送らせて頂いたことを覚えています。バス停の混雑の現状やロードペイントのメリットについて説明したところ、とても丁寧なお返事を頂き、更には現地視察の提案までしてくださいました。当時高校1年生の私にとって、自分が行いたいと思っていた活動にここまで賛同して下さるのが嬉しかったと同時に、議員さんが思ったよりも身近な存在であることに驚きました。これから、何か実現したいことがあったら、簡単に諦めず様々な手を尽くすようにしたいと思います。今後は都市計画や、まちづくり、特に駅周辺の整備などに携わってみたいです。

さて、後日談だが、Jくんたちは「中高生探究コンテスト2025」にこのバスプロジェクトを応募し、全国で4275件集まった作品の中から、見事最優秀賞を受賞したそうである。発表は卒業する3月だったとのこと、素敵な卒業プレゼントになったことであらう。おめでとう！みんな！